池田末利先生の思いで

吉田篤志

池田末利先生と私が初めて出會ったのは、先生が廣島大學を定年退官されて母校（先生は大東文化學院の本科を卒業後、廣島文理大の高等科へ進學された）の本學へ赴任された昭和四十八（一九七三）年四月である。入學間もない一年生は三クラスに分けられ、各クラスの擔任を待っていた。私のクラスに入ってきた分厚いレンズの眼鏡をかけた擔任が池田先生であった。その時、先生が何をおっしゃられたかよく覺えてないが、いきなり「君らは反映という字を書けるか」と黑板に「反映」という字を書き、「鏡にうつるに「映」ではなく「寫」を當ててしまう者がいるから、漢字の意味や成立ちをよく理解しなければいかん」（正確にはこの通りでなかったかも知れない）とおっしゃったことだけを覺えている。

その後、先生の「中國哲學史概說」を一年間受講することになった。講義の進め方は、先生が原稿用紙に書いた內容を讀み上げ、それを學生がノートするという形式であった。先生の視力はかなり惡いらしく、原稿用紙にほとんどくっつきそうなくらいに眼鏡を寄せて讀み上げ、時々難しい言葉が出てくると、黑板に早書きの獨特の書體で書いて說明した。胡適や馮友蘭らの說を引用し、「概說」とは言っても一年生にとってはかなり高度な內容であったため、授業終了後にある學生がもう少し易しくして欲しい旨を傳えると、先生からこれ以上易しくできないとの應えが返ってきたことを思い出す。その時のノートは今も大切に保存してあり、ノートを開くと當時の講義の様子が思い起こされる。

我がクラスの擔任であった先生を圍んで、川越でクラスコンパを開いたことがあった。その時のコンパには後に明治大學に移られた進藤英幸先生も參加されたように記憶している。池田先生は廣島大學在學中に原爆の二次被爆を體驗したためか、よく「酒が藥なんだ。放射能を洗流してくれる」と言って、かなりの酒量を召し上がっていた。この時のコンパにも一升瓶を持込み、「これは旨い酒なんだ」と言って浴びるほど召し上がり、進藤先生もついて行けなく、途中で退散された。お開きの後、先生を見送ったが、さすがの先生も千鳥足で歸っていった。先生は洋酒よりも日本酒がお好きであったが、若い頃、中國での四年間の留學經驗からか、中國酒、特に白酒がお好きで、アルコール度數五、六十度くらいの強い酒を一度に三十杯乾杯したことがある、と自慢しておられた。とにかくお酒は好きであったが、我々に無理強いして飲ませることはなかった。

二年生になると、中文での先生の授業は無かった。これは先生が法學部に所屬されていたからであるが、擔當したのは中文の講義だけであったように記憶している。法學部は昭和四十八年に創設されたのであるが、創設に當たって規定の教員をそろえるために、ちょうど廣島大學を定年になられた先生が呼ばれたのであった。赴任二年目の先生は圖書館長に就任され、舊事務棟の前にある研究棟で仕事をされ、研究棟の前を通るとガラス窓越しに、いつも机に向かって何かされている先生の姿を拜見することができた。後で聞いた話であるが、先生はそのころ後に出版された『儀禮』の譯注を整理されていたとのことであった。『儀禮』の譯注作業は廣島大學の大學院生らと行われていたものであり、中文の原孝治（當時は河﨑孝治）先生もそのメンバーの一人であった。『儀禮』の譯注は東海大學出版會から古典叢書シリーズとして全五冊で出版され、當時シリーズの監修をしておられた京都大學の吉川幸次郎先生が一、二冊くらいで仕上がると思っていたらしく、全五冊と聞いて池田先生の考證の緻密さに驚いたそうである。

同級生の中には先生に讀書會をお願いし、劉寶楠の『論語正義』を讀んでもらっていた者もいたが、私は勉强不足か

ら先生に近づくのが怖く、ついに讀書會に參加できなかった。後年、大學院に入學してから參加するようになり、まだ『論語正義』を讀み續けていたので、當時比較的安價であった四部備要本を買い、讀書會の下讀みを始めた。當時は新式標點本など無く、唯一校點された國學基本叢書本を圖書館から借りて參考にし、四部備要本に朱點をふっていった。『論語正義』は卷十八衞靈公篇からは劉寶楠の息子恭冕が父の後を繼いで完成させたもので、卷二十四論語序および恭冕の後敍を讀み切ったときの爽快さを今でも思い起こすことができる。先生は自藏の原刊本を持參され、鉛筆で句讀を打ってゆかれ、白文をスラスラ讀んでゆかれる先生のお姿を拜見した時の驚きを、今でも鮮明に思い出す。

卒業後二年間の就職を經て大學院に入學した私は、中文の原田種成・栗原圭介・猪口篤志の諸先生らの他に、やはり法學部所屬の池田先生や東洋史の中嶋敏先生の講義を受けることになった。當時、池田先生は圖書館長を一年された後、學長職に就いておられ、さらに學外では日本學術會議の改革委員會の副委員長をされていたため、多忙を極めていた。そんな中で先生には我々のために週一回の大學院の演習授業を持っていただき、演習は學長室で行われた。會議で時々祕書が呼びにくると、先生は「すぐに戻るから、先を讀んどけ」と言って出て行かれた。會議が紛糾すると「緊急避難」と稱して戻ってこられ、演習を始めるのであるが、すぐに祕書が呼び戻しに來た。

大學院の演習では、先生に陳立の『公羊義疏』と鍾文烝の『穀梁補注』とを讀んでいただいた。私が修士課程の時に『義疏』を、博士課程の時に『補注』を讀んだのであるが、週一回の演習と會議のための中座で、『義疏』は桓公に入ったところまでしか讀めなかった。『補注』については、私が博士課程三年次に、先生は自ら敷いた定年制に從い退任され廣島へ歸られたので、日本學術會議の用事（宗教研連）で上京された折に湯島聖堂を借りて何度か讀書會を設けていただき、あとは有志で夏合宿を組み、廣島の先生の別莊に泊まり込んで讀み切った。演習時の先生は嚴しく、スラスラと讀んでいるうちは機嫌がよいが、讀めなかったり間違ったりするとイライラしてきて、「トイレに行ってる間に考え

とけ」とおっしゃって出て行かれたり、ひどい間違えをすると「小學校からやり直せ」と罵聲を浴びせられた。

先生の上京した折の宿泊先は東松山校舎の教員宿舎（現運轉手控室）であり、當時は教育學科の橘與志美先生や英米文學科の田仲勉先生らが在住されており、遠くから通いの先生方も宿泊されていた。先生が先に上京され奥様が後から上京される時や、奥様が何かの用事で先に歸られる時など、私が食事を作りに泊まり込みで宿舎に出向いた。當時、私はアパート暮らしの自炊をしていたので、食事を作ることには慣れていたし、先生もそのことをよくご存じであった。先生は夕食時に必ずお酒を召し上がり、醉った勢いでおっしゃるお話は興味深いものばかりで、特に斯界の錚々たる先生方を批判していく様は、今でも小氣味よく思い出す。

日本學術會議の仕事もよくこなされていた。何度かご一緒したことがあるが、晝食どきに行くことがあると、側のレストランで食事を濟まされるのが常で、「ここのカレーは旨い」と言って、いつもカレーライスを注文されていた。先生が仕事の閒は、私は學長車の運轉手の伊藤七郎氏と雜談することが多く、雜談と言っても、伊藤氏は民俗學や神社佛閣のことについて詳しく、博學多才の方であるので勉强になり、退屈することはなかった。また仕事が早く終わると、近くの根津美術館等へ寄ったりしたものである。いつもは關越自動車道を通って板橋校舎と東松山校舎とを往復するのであった。伊藤氏の運轉技術は完璧で話もおもしろかったが、ヘビースモーカーの先生は車内でも喫煙されるので、これにはさすがに閉口した。

休日には伊藤氏の案内で神社佛閣巡りをしたこともあり、たまに泊まりがけで溫泉に宿泊したこともあった。先生は地方に出かけたときは必ず溫泉に入るほど大の溫泉好きで、霧積溫泉や萬座溫泉に連れてってもらったこともある。また妻戀のセミナーハウスへ行ったこともあった。この時はスクールバスを出してもらい、先生と伊藤氏、大學院生一名・バスの運轉手一名と私の五名で出かけた。ちょうど臺風の直擊を受けて登山道に木が倒れ歸れなくなり、セミナーハウ

スに二、三日罐詰狀態になってしまったことは、今でも記憶に新しい。『論語正義』を讀み切ったのは、この時のことである。

先生は大學を退任後、廣島へ戻られたのであるが、もともと九州久留米出身である先生が廣島にお宅を構えておられるのには譯があった。原爆で亡くなった廣島大學の親友を近郊の廿日市市から探しに行き被爆されたのであった。被爆後、四十度近い熱が一ヶ月も續いたとのことである。現在のお宅はその親友の住んでいたところにある。夏合宿の時にはその廿日市のお宅に立ち寄り、奥様が既に合宿の食事等の用意を濟ませており、我々はこれを持參して別莊に向かうのが常であった。車で三、四十分のところにある標高六、七百メートル程の小高い山の、その山頂より少し下ったところに別莊はあった。表札に「池田別墅」と墨書されているのを見て、「先生は書齋名や雅號を付けないのですか」とお伺いしたら、「わしは雅號が嫌いなんじゃ」との返答があった。別莊の正面には嚴島が浮かび上がり、嚴島神社の花火大會には特等席であった。夏合宿中は先生の案内で嚴島神社や岩國の錦帶橋、さらには三段峽や湯來溫泉等にも連れてってもらった。溫泉好きの先生であるから特に湯來溫泉には何度か足を運んだ。

先生の學界での業績は、國際アジア・北アフリカ人文科學會議（現ICANAS）の日本（東京）開催に盡力したこと、日本學術會議の改革委員として改革に努力したこと、日本中國學會の理事長として學會を改善したこと等が擧げられる。餘談ではあるが、日本學術會議の改革委員會の副委員長として委員長の岡倉古志郎先生と共に改革中に、政府關係者から左派呼ばわりされたことに對して、「わしが左ならみんな左じゃ」と言って憤慨されたことがあった。また日本中國學會の理事長就任中の年次大會で、從來、理事長以下の役員が胸に菊花をあしらったリボンを付ける習わしであったものを、「そんな仰々しいことは止めろ」と言って、理事長就任中は禁止にしていた。ことほど左様に、先生は形式張ったことはお嫌いであった。先生の古希記念のパーティーで、某先生が祝辭の中で「池田先生ほど禮を研究しながら、禮

とほど遠い人はいない」と述べたそうであるが、言い得て妙というほかなさそうである。

學問的業績は、『中國古代宗教史研究』・『儀禮』譯注・『尚書』譯注等に凝縮されている。『中國古代宗教史研究』は從來の民俗學的研究方法に甲骨學等の出土資料を使った研究方法を加味したところに、先生のパイオニア的精神が伺える。『儀禮』譯注は、圖示しないと理解しがたいと言われた『儀禮』に、分かりやすく圖を施し、出土資料の武威漢簡と比較對校したことは、現時點で最も分かりやすく信頼の置ける邦譯と言えよう。『尚書』は、韓愈をして「佶屈聱牙」と言わしめ、王國維に「分からないところがある」と言わせたほど難解な文獻であるが、『尚書』譯注は『儀禮』譯注と同様、清朝考證學は勿論のこと、近現代の學者の說まで網羅してあり、その正鵠を得た解釋を見れば、未だ先生の右に出る者がいないことを理解できよう。

『中國古代宗教史研究』出版の折に、私はその校正の一部を手傳った。その時初めて先生の研究論文を精讀し、その精緻な研究に改めて感服したことを思い出す。また『儀禮』譯注を再版するとき、原文の句讀を張爾岐の『儀禮鄭注句讀』で再確認する指示を受け、本格的に『儀禮』を讀むことになった。『尚書』譯注については、先生は「もう一度補訂したい」と言っていたが、ついに補訂はできなかった。なお先生が廣島大學在任中に孔版出版した『殷虛書契後編釋文稿』について、先生は「中國の學者と協力して增補訂正したら、いいものができるんだが」と言っていたが、これも實現できなかった。これは先生の甲骨學の分野で名を知らしめた著書であり、現在もその價値は失われていない。なお晩年は先周文化の研究に打ち込み、一連の「試談先周文化」（『東方學會五十周年記念論集』・『東洋古典學研究』他）の論文を著された。

先生が晩年になっても研究意欲の衰えなかったことは、一九八七年から立て續けに中國での學術會議に參加されたことからも伺うことができよう。私は八七年の安陽、九一年の洛陽、九五年の北京の三度の學會參加に同行させていただ

いた。八七年は先生の留學時代以來の北京訪問であったので、懷かしさから當時住んでいた胡同を訪ねたら、壞されかけた廢屋にその面影を見出し、しばし感慨に耽っておられた。その他、先生の思い出の場所に同行したことを思い出す。九一年の洛陽の學會では、「中國夏商文化國際學術研討會」と銘打っていることからも分かるように、夏文化にスポットが當てられ、夏王朝が大々的に喧傳されだした時であり、その後九六年に「夏商周斷代工程」と名付けられた研究計畫が國家的プロジェクトとしてスタートし、二〇〇〇年には夏王朝の成立を紀元前二〇七〇年と斷定した。九一年の洛陽の學會で、先生は夏王朝の實在を證明する文字資料の出土を待たずに卽斷することを戒めているのであるが。

先生の人と爲りは、學問的嚴しさの反面、形にとらわれない無邪氣さがあった。かつて中國語の井上隆一先生（大東文化學院本科の一級後輩）が、「圖書室を覗くと、いつも池田さんが机に向かっていた」とおっしゃっていた通り、若いときからの一貫した學問への情熱は、晩年になっても衰えを知らなかった。先生はお疲れになると學長室の椅子にあぐらをかいて座り込んだ。この姿勢が威張っているように見えたのであろうか、私もそのような噂を耳にしたことがあるが、宿舍に戻られて着替えを濟ますと直ぐにソファーに横たわりリラックスするお姿を見れば、學長職がかなりハードであったとみえ、その疲れをいやすための姿勢であり、外見にこだわらない先生らしいエピソードである。先生はかつて「わしが死んだら葬式はやらん。人の葬式や結婚式にも出たくない」とおっしゃっていたが、私の結婚式には無理矢理出席いただいたし、先生のご葬儀も嚴かに行われたので、先生は天國でさぞ苦笑しておられることであろう。